

レヴァント回廊の歴史を探る

—第11次(2025年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の考古学調査—

西山 伸一 中部大学人間力創成教育院・教授

ジャニン・アブドゥル＝マッシーハ 国立レバノン大学・文学人間科学学部芸術・考古学科・教授

Investigating the History of the Levantine Corridor

—The Eleventh Season (2025): The Archaeological Project on Phoenician Port of Batroun, Lebanon—

NISHIYAMA Shin'ichi Professor, School of General Education, Chubu University

ABDUL MASSIH, Jeanine Professor, Department of Arts and Archaeology, Faculty of Letters and Human Sciences, Lebanese University

1. はじめに

レバノン共和国の地中海沿岸、ビブロス(現在のジュベイル)とトリポリ(現在のタラーブルス)の中間に位置するバトルーン市において、中部大学とレバノン大学の合同調査団は、2018年以降、発掘調査と研究を継続してきた。2025年度は、日本政府外務省・草の根文化無償資金協力(Grant Assistance for Cultural Grassroots Project: GCGP)(以下「草の根文化無償」)による「バトルーン遺跡遺構展示施設整備計画」(Project for the Development of Exhibition Facility of Archaeological Site in Batroun)として遺跡の一部を「遺跡公園」として整備した。

このプロジェクトの当初の期間は、2024年2月26日から2025年2月までであった。しかし、2024年10月のイスラエル軍によるレバノン侵攻によって国内情勢が混乱したため、プロジェクトは4か月延期され、2025年6月25日に完了した。プロジェクトのレバノン側の受け入れ機関はNGO組織ADUNA(ローラ・サアデ＝ボゴシアン会長)であったが、レバノン政府文化省考古総局(Direction Générale des Antiquités du Liban: DGA)、レバノン大学、および中部大学レバノン遺跡調査団の協力によって実施された。

上述のレバノンとイスラエルの紛争は、2024年11月27日に停戦合意が発効して以降、小康状態であるが、いまなおイスラエル軍による散発的な爆撃が行われ、完全な治安の安定化は図られていない状態である。そのような中、レバノン側の献身的な努力により、草の根文化無償のプロジェクトは完了した。現在、ベイルートからバトルーンの沿岸部は、外務省の海外安全

情報によれば危険レベル2(不要不急の渡航は止めてください)だが、その他の地域は、危険レベル3(渡航中止勧告)、および危険レベル4(退避勧告)が出されたままである(2026年1月現在)。

上述のプロジェクトの整備事業は、2025年1月の追加の発掘調査を含み(昨年度の報告会報告集で言及)、2025年6月まで断続的に実施された。対象地域は、H地区である。また、バトルーン市の南部(Plot 1602)において緊急試掘調査が実施された。期間は、2025年6月18日から7月1日であった。

2. H地区の整備事業

H地区(Plot 1350-1351)は、住宅の建て替えに伴い、考古総局(2017年)、およびレバノン大学・中部大学合同調査団による発掘調査(2020~2025年)が行われ、地主と考古総局の協議の上、出土した建築遺構をそのまま保存し、その上に住宅を建設することとなった地区である。経済危機や治安悪化を乗り越え、住宅建設は、大幅に遅れているものの、徐々に完成に向けて進展している(2026年1月現在住宅はまだ完成していない)。現在、住宅の外観は、ほぼ完成し、発掘調査で出土した遺構は、住宅に覆われている状態である(図1)。

草の根文化無償により、2025年2月から整備が進んできたが、2025年3月以降、以下のような進展が見られた。まず、鉄とステンレス製の見学者用の通路が完成した。この通路は、住宅の東を南北に走る旧市街の道路から住宅の地下に導く部分(図2)と、H地区の南西部から海岸部に出るための部分(図3)の2か所が建造された。海岸には、バトルーン遺跡のシンボル



図1 H地区を西から望む。出土した遺構の上に現代の住宅が建造されている。



図2 H地区の遺構の上に建造された入口部分から地下へと降りる見学者用の通路(西より)。



図3 H地区の遺構の上に建造された海岸部へと降りる見学者用の通路(西より)。

的存在でもある「フェニキアの壁」と呼称される海際に立つ壁を含む石切り場跡がある。H地区の発掘で、その西端にレバノン沿岸部では初の鉄器時代に明確に年代付けられる石切り場跡が出土したが、この海岸部の石切り場跡との関係がバトルーン遺跡の成り立ちに興味深い成果をもたらすと考えている。



図4 H地区の層位が観察できる施設(西より)。



図5 見学者用の通路の南側にある壁に設置された説明用パネル(一部)。

さて、見学者用の通路以外では、この通路の下に残る、ローマ時代、ペルシア時代、および鉄器時代の遺構について昨年度他の遺構で行ったように、床面に年代別の色付き砂利(鉄器時代：橙色、ペルシア時代：灰色、ローマ時代：黒色)を敷いた。さらに入口部分の通路の進行方向左手に位置するH地区の東セクション壁を薬剤で固め、各層にラベルをつけ、その表面をアクリル板(ポリメチルメタクリレート)で保護した。これにより見学者は、この地区の層位を観察することができる(図4)。

また、遺跡公園の入口部および見学者用の通路の南側にある壁にそって、バトルーン遺跡およびH地区についての説明用パネルを設置した。これにより見学者は、バトルーン遺跡の歴史的意義やこれまでの考古学調査の歴史・成果について知ることができる(図5)。

この地区の西端には、この地区の見せ場の1つである鉄器時代とローマ時代の石切り場跡があるが、その一部の壁が埋没する過程で崩落の危機に瀕していた。具体的にはローマ時代と鉄器時代の間にある壁であり、考古総局と協議の上、コンクリート製の基礎の上に砂



図6 補強処理をした石切り場跡の壁の一部(北より)。

岩の壁を立てることとした。この基礎は、外見が着色され、周辺の石壁から目立たないようにしてある(図6)。

ただ、残念なことに2026年1月上旬の嵐の日に、今度は上述の補強した壁の南にあったより大きく分厚い石壁が崩落した。考古局と協議の上、記録をとった上で何かしらの復元措置をとる予定である。この出来事は砂岩に掘り込まれた石切り場跡は、風雨や塩分にかなり脆弱であることを示している。将来的には長期的な保護手段が必要かもしれない。

H地区の北西部、鉄器時代の最大の石切り場跡(Sector D)のすぐ東に展示スペースを設置し、見学者がさらに深くこの遺跡について学べる場を作成した。ここには、コンクリートの壁面にショーケース(陳列棚)が設置され、今は現代の石切り関係の道具が展示されている(図7)。これは、出土した石切り場跡を説明する際に使用される予定である。当初は、バトールン遺跡から出土した遺物を展示する計画であったが、管理の問題から石切り関係の道具の展示に切り替えられた。



図7 現代の石切り関係の道具が展示されたショーケース(南より)。

また、展示施設の北西部の天井に大型プロジェクターを設置し、発掘区の3D映像を含む遺跡の説明動画を流す予定であった。大型プロジェクターは購入したものの、設置場所が野外、それも海からの潮風を直接受けることから、維持・管理の問題があった。日本大使館や考古総局との協議の結果、将来的に博物館あるいは屋内の展示施設がバトールン市にできた際、そちらにプロジェクターを設置することとした。プロジェクターで投影予定であった壁には、遺跡関係の写真パネルを展示する案が出されている。

以上のような整備を経て、2025年6月に遺構の展示施設は完成した。治安悪化や遺構の上に立つ住宅の建造遅延にもかかわらず献身的に努力してくれたレバノン側に感謝申し上げたい。2025年7月3日に施設の仮オープニングが行われ、同年11月12日に馬越正之駐レバノン日本国特命全権大使を迎えて完了式典が行われた(図8-9)。レバノン側の代表は文化大臣の代理としてSarkis El-Khoury レバノン文化省考古総局総裁が務めた。また、バトールン市からは、Marcelino Al-Harek バトールン市市長が出席した。

レバノンには、数々の貴重な考古遺跡が存在するが、このように出土した建築遺構をそのまま保存し、展示している施設は限られている。特に鉄器時代の遺構は、バトールン遺跡以外では、ベイルートのダウンタウンで出土したフェニキア時代の遺構だけである。フェニキア文化の本土といわれるレバノンで、かくもこの時代を代表する遺構が保存公開されている事例は少ないのが現状であり、バトールン遺跡の事例はレバノンにとって貴重な先例となるだろう。またこの遺跡公園化が日本の支援によって行われ、一般に公開されることは、日本とレバノンの文化関係がさらに深まるとも



図8 2025年11月の駐レバノン日本大使が参加した完了式典の主要メンバーの記念写真。



図9 同完了式典での「遺跡公園」の入口部風景(東より)。

に、文化遺産を通じた日本の国際貢献がより発展することを願う。中部大学は、文化庁委託事業としてレバノンの文化遺産に関連する人材育成・技術移転を2020年度から継続してきた。バトルーン遺跡の一部が遺跡公園化として公開されたことを契機に、さらなる支援を継続してゆければと考えている。

3. D地区とI地区の説明パネル設置

上述のH地区以外でも中部大学・レバノン大学合同調査団は、出土した遺構の保存公開を進めている。2025年度は、そのうちの2か所で活動を行った。1つはD地区である。H地区の北方に位置するこの地区は、合同調査団がバトルーン遺跡で最初に鉄器時代・ペルシア時代の文化層を発掘で確認した場所である。この地区は保存処理が終了しているが、1年を経過して植生などにより景観が悪化していたため、これを整備し、さらに説明パネルを設置した(図10)。



図10 D地区に新たに設置した説明パネル。

I地区のあった場所はすでに住宅が建造されているが、ここから出土したローマ時代の窯の実物が保存展示してある(ただし、設置場所は出土地から移動)。ここにも新たに説明パネルを設置した。

バトルーン遺跡の発掘調査は、主に旧市街の各所で行われているが、説明パネルはまだ限られており、出土遺構が現状保存されている箇所は僅かである。将来的には、これらの調査区をうまくつないで見学できるシステムを構築し、見学者がバトルーン遺跡の全体像を容易に把握できるようにしたいと考えている。

4. バトルーン市南部の試掘調査

この地区(Plot 1602: 約1500^m2)は、これまでの調査区の中で最南端に位置するJ地区からさらに南西方向に位置している。ここでは、2025年度に住宅建設に伴う緊急試掘調査があった。表土層を除去したところローマ時代の石組墓と土壇墓が多数検出された。この地区で発見された墓は、J地区、およびこの地区のすぐ南にあるリゾートホテルの建設に伴い考古総局による緊急調査で発見された墓と同様のものであった。今回の発見は、バトルーン市の南部には、広大なローマ時代の集団墓地(ネクロポリス)が存在したことを示唆する。試掘後、地主や考古総局と協議の上、この地区の本格的な発掘調査は行わず、検出した墓地を記録し、埋め戻した。

5. まとめ

バトルーン遺跡の調査は、第11次を迎えた。今回は、発掘調査をほとんど実施しなかったが、過去に発掘した遺構を保存公開するという重要なプロジェクトを実施、完了した年度となった。西アジアにおける考古学調査は、もはや発掘して終わりではなく、出土遺構

をいかに保存し、可能であれば公開する流れになって久しい。レバノンでは、19世紀から考古学調査が継続してきたが、公開されている考古遺跡は限定的である。無論、遺跡で出土した遺構が公開できないのは各国・各地なりの様々な理由があるが、現地の文化遺産に対する意識をよりよい方向に向かわせるためにも、また観光資源としての文化遺産の在り方を考えてゆくためにも、遺跡の公開は重視すべきであろう。バトルーン遺跡の場合は、幸いにも日本の資金援助にくわえて地主や考古総局の理解があって実現することができた。今後ともバトルーン遺跡を先例として、レバノンの文化遺産の重要性と多様性がレバノンの国内外で理解されるよう地道に努力を重ねてゆきたい。

バトルーン遺跡の調査および草の根文化無償のプロジェクトは、レバノン文化省考古総局の Sarkis El-Khoury 総裁、同局北レバノン地域担当官 Samar Karam 女史、および在バトルーンの考古総局職員の方々より多大なる支援をいただいた。また、在レバノン日本国大使館からは大使閣下をはじめ文化担当関係者より全面的な協力をいただいた。ここに深く感謝申し上げます。さらにH地区の整備作業では、Rola Saade Boghossian (ADUNA 会長)、Mouhamad Abdel Sater (フリーランス建築修復家)、Paula Abou Harb (Wormhole Architecture 建築デザイナー)、Rami Yassine (フリーランス建築デザイナー)、Hassan Gh-

addar (フリーランス考古学者)、Marc Yammine (フリーランス建築家)、Roland Haddad (フリーランス建築家)、および Marcelino Al-Harek バトルーン市長の協力をいただきました。この場をかりて関係諸氏に厚く御礼申し上げます。なお、草の根文化無償以外の調査は、レバノン大学、中部大学、および個人出資者からの支援を受けた。

■参考文献

- ・ J. Abdul Massih (ed.) 2025. *Batroun Archaeological Site Plot 1350-51. Presentation and Site Museum Project* (Beirut). (Report submitted to the Lebanese DGA, July 2025).
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル=マッシーハ 2021 「レヴァント回廊の歴史を掘る—第6次(2020年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』41-46頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル=マッシーハ 2022 「レヴァント回廊の歴史を掘る—第7次(2021年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』38-42頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル=マッシーハ 2023 「レヴァント回廊の歴史を掘る—第8次(2022年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』119-123頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル=マッシーハ 2024 「レヴァント回廊の歴史を掘る—第9次(2023年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』134-138頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル=マッシーハ 2025 「レヴァント回廊の歴史を掘る—第10次(2024年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』130-134頁 日本西アジア考古学会。